第七章　「インデペンデント」の陥穽

漱石を反国家主義・反帝国主義とみなす認識は文豪「漱石」に対する信頼の結果と思われるが、そのような認識は単に研究者たちの間だけのものでなく日本社会全体の認識となっていると言えるだろう。たとえば外国人向けの歴史教科書が日本の「アジア地域への武力進出」について述べながら「このような日本政府のやり方にたいして反対したのは、社会主義者や夏目漱石、与謝野晶子などの文学者」（注１）としていることからもそれは言えるのではないか。

確かに漱石は、一見戦争や軍国主義を否定する言葉や国家主義への疑義を提示する言葉を残している。しかし、すでに前章で見たように、そのような発言に時代を批判する力があったとすることはできない。それでも「漱石」を救おうとする言葉は相次ぎ、だとしたら問題はむしろ漱石の同時代的限界自体よりもそのような現代状況のなかにあると言うべきだろう（注２）。

漱石が逃れられなかった同時代的限界とは、いわゆる大正デモクラシーそのものがはらんでいた限界のことである。そもそも、大衆の政治的参加は、日露戦争終結においてもっと領土をとれという日比谷焼き討ち事件にあった。大正ヒューマニストといわれるイデオログの多くは、内においては民主主義・個人主義を主張しながら、外に対しては、日露戦争で獲得した植民地支配を当然としていたが、漱石もその例外ではない。

彼らは優勝劣敗を露骨に説く帝国主義者とは違っている。しかし、当時人々を動かしていたのは必ずしも露骨な帝国主義的言説ではなかった。むしろそれを否定する言説のほうが、人々の心を捉えていることをこの時期の状況は示している。そういう意味では日本のファシズムの基盤が十九世紀型の露骨な帝国主義ではなく、一度「大正デモクラシー」を経由したところに成立するという指摘は傾聴に値しよう（注３）。

同じように、漱石の個人主義そのものには、日本帝国主義を容認させてしまう要素が含まれていた。さらに、この時期の帝国主義はいわば感受性のレベルに定着しているところを見せていて、漱石もまたそのような「感受性」を共有していた。「感受性」は一見個人的なものに見えるが、実は歴史的・制度的に形成されるものである。

そのような文脈を見ることなく漱石の言説の表層だけをとり出しての評価はまちがっているだけでなく、危険なことといわねばならないだろう。にもかかわらず、依然として反国家主義や反帝国主義の枠組みの中に漱石をおいて「漱石」を語る試みは続いており、そ

れは漱石神話をますます強固なものとしている。しかし、漱石の言説が含む落とし穴を見ないままの漱石神話は、誰に、何に益することがあるのだろうか。

再び漱石とアジアとの関係を論する私の意図は、漱石を帝国主義者として糾弾することにあるのではない。漱石を巻き込んだ歴史の構造の力は、ある意味で今でも続いていると思われるのであり、むしろそうした問題点を現代の中に見ることにこそ本稿の意図はある。

一、模倣する〈言葉〉

最初に、日本の帝国主義の対象となったアジアに対してたびたび使われた「汚い」（『満韓ところべ』。以下『満韓』とする）という言葉に関してもう一度考察したい。これをめぐっては、早くから「帝国主義的優越感」（注４）を読み取る解釈があるかと思えば、それは「諧謔」（注５）だったとして差別や帝国主義とは無関係だったとする解釈が対置するような状況が続いており、漱石における帝国主義を考えようとする場合、避けて通れない問題と思われるからである。

「汚い」対象を「汚い」と語るエクリチュールの問題。それは「差異」か「差別」か。しかしたとえそれが「差別」だとしても、それを「帝国主義」と結びつけるにはもう少し繊細な手続きが必要となるだろう。

たとえば、前章でとりあげた調査報告書、南満州鉄道会社編『満州産業界からみたる支那の苦力』を改めて繰ってみると、〈清潔度〉への注目は漱石だけのものではなかったことに気づく。

この調査書は中国人労働者たちをレベル分けし「上級の部類は平素土布又は日本製の綿布を著し比較的に清潔にしてゐる正月や慶弔の際には軟か物を著し、食事は時々魚肉や獣肉を食ひ住家も割合に広くて清潔」「中級の部類は正月とか祝日の外は長衣を著る事が殆どない食物も出来る丈け節約するし、住居も頗る手狭で穢いのを常とする」「下等の者は多く山東省からの駆け出しの苦力に属し、破れ衣服を身に纏ひ、陋屋に群居し部屋の内に棚を釣りて寝るを以て六畳一間に十人内外を収容し、夏は路傍又は人家の軒下に仮寝するのも大部を占むる」といったような具合で中国人労働者の〈清潔度〉について繰り返し書き留めている。それはやがて、「彼等は殆ど入浴しない」「入浴をせぬばかりか毎朝に於ける洗面は全く省くものが多い。此点に於いては人というよりか寧ろ猫にも劣るといはねばならぬ」「我々には到底飲めない濁つた水を平気で飲んで何の異常もない」というような、単

なる報告をはみ出した文章となっていくのだが、このようなチェックをさせている〈清潔〉意識は、実は近代以降輸入された衛生観念の洗礼から生まれたものであった。

それは「又夏の夜は樹下石上に眠る、これは南京虫の襲撃を懼れる為ではあるが、こんな非衛生的の生活を平気でやつて居るのは余程身体が頗る頑丈に出来て居ると見ゆる」という言葉からも明確に見てとることが出来るのだが、このような衛生意識が、近代日本が文明国を目指して積極的に取り入れたものの一つであるのは周知の通りである。

たとえば明治十年代にはすでに次のような衛生論が新聞媒体を通して人々に届いていた。

> 蓋シ衛生ノ要ハ平常不断人民ノ健康を保全スルニ在リテ病患発生ノ後チニ於テ匆々之レが計ヲ為スベキニ非ズ。而シテ伝染ノ症ハ特リ虎列刺ヲ畏るベシト為サザレバ、苛モ当局ノ吏人ニシテ、一般住民ノ健康ヲ害シ、或ハ病毒発生ノ源タリ、或ハ之ヲ誘進スルノ端ナリト認定スル有ラバ、即チ令シテ其ノ害物ヲ除却セザル可ラザルナリ。**就中空気ト飲水**トハ往々伝染病毒ヲ流送スルノ外、其ノ偶々汚穢物ヲ含蓄スルニ於テハ、亦人ヲシテ各種ノ病患ニ罹ラシムルニ足ルナリ。府下衛生ノ警察を担当する警視局ノ如キハ如何ゾ。**此ノ人生ニ大関係アル水気**ノ二物ヲ清浄ナラシムルノ責メニ任ゼザルヲ得ンヤ。
> （明治十二年五月二十九日付『朝日新聞』論説「衛生論」、ただし引用は『日本近代思想大系二十二　差別の諸相』、岩波書店、１９９０・３による。）

衛生意識は後述するように衣食住全般に及んでいたが、右の文章はわけても「水」と「空気」の清浄が重要視されていたことを窺わせてくれる。さらに、 明治二十一年に配布された「衛生かぞえ歌」にも「身にまく着物は折々に洗うてのり気のあるように」「いつも内外掃除して」「慣れぬ食い物食わぬよう青物生物子にやるな」「やすいたきぎで湯を沸かし必ず生水飲まぬよう」などの文句が見られ（ただし引用は小野芳朗『清潔の近代』、講談社、１９９７・３）、やはり、「衛生」が着物や住まいに関する目に見える「汚れ」の駆逐とともに生ものや生水の禁止をも強調するものだったことが示されている。私たちはそこに、満鉄の調査が「着物」や「住まい」だけでなく「食べ物」や「水」にも言及していたことの背景を見ることが出来よう。

目で確かめられない「空気」や「水」の汚れを忌むこのような衛生知識が、近代科学のたまものであることは言うまでもない。「衛生」への意識は〈近代〉の産物でもあったわけだが、〈近代〉がその形をほぼ整えていた一八九五年に「万国衛生博覧会」が開かれ、各国

の衛生統計が出されていたということはそのことを証明していよう。衛生統計はそのまま「その国の衛生状況、つまり文明度がわかってしまう」（小野、前掲書）資料だったのであり、そこから衛生意識はそのまま「文明」国家としての自負につながっていくことになる。そのような事情は次の福沢の言葉からも窺い知ることが出来る。

> **日本の文明開化駸々乎として進歩する其中**に就て、医学の進み方は最も著しき又その中にも、近来は別して衛生論が喧しくなりて、衛生学者の注意尽力、中々以て容易ならず、**或は之を筆にし、或は之を口にして至り尽さゞるはなし。**（中略）其深切の細にして道理の尤もなるは、吾々が日本人民として自から之を悦ぶのみならず、**外国人どもに対しても聊か鼻を高ふするほどの次第なるに、然るに爰に**各地方の田舎に行て其様子を見れば、誠に不埒千万なる哉、**衛生を軽んずる一種族あり。名付けて貧民**と云ふ。此者等の不養生なること、第一人生の体温を保つに必要なる衣服を薄ふし、寒天にも僅かに一枚を覆ふか覆はざるかの様にして、然かも其品は穢れ腐りて鼻持もならず、衣服にして斯くの如くなれば、其膚の穢れたるも固より論を俟たず、気孔の蒸発を妨るのみか、日々夜々腐敗気の中に湮没するものと云ふも可なり。尚これより甚だしきは人の命の根本たる食物のことを何とも思はず、三度の食事の不規則にして、食ふたり食はなかつたりするのみならず、其食料の品柄を尋れば滋養第一の肉類魚類を遠ざけて之を食はず、下て植物の品類中にても米麦は甚だ軽量に用ひるか若くは絶て之を用ひずして、多くは稗子などを食ひ…（略）

（福沢諭吉「衛生論」、明治二〇年八月五日付「時事新報」漫言、ただし引用は前掲『差別の諸相』による）

かつてフロイトは＜清潔＞を「文明」の特徴とみなしていたが（注６）、〈清潔〉に関する衛生意識はこのように文明国家を目指す「近代国家の条件」（小野、前掲書）でもあった。だからこそ日本の文明開化を先導した福沢としては文明国家たるべき日本の足をひっぱっている存在として「貧民」に対する露骨な嫌悪を表すほかなく、そのような嫌悪は彼らを「差別」の対象としていく基盤をつくってもいたのである（注７）。

衛生論が、国民を対象に食事の内容や回数、着物の洗濯の仕方までも指導していた背景には、富国強兵をささえる丈夫で強い国民で構成される「近代国家」幻想があった。そして、中国人の服の着方や食事の仕方にまで注目する満鉄の調査部の意識の背後にこのよう

な近代的衛生観念が存在していたことは明白である。

実際、初代満鉄総裁後藤新平の衛生政策や、それを引き継いだ中村是公の政策によって満鉄は「衛生」に十分に意識的な集団となっていた。ドイツで近代医学をまなび、いちはやく『国家衛生原理』を著したこともある後藤新平が近代国家としての日本の理念としての「衛生思想」の普及者でもあったことはつとに知られるところだが、明治四十年には「居留地の衛生・医療事業は、軍隊を中心とする日本人社会の特性上、また日本国内への伝染病の蔓延の防止策上からも、さらに朝鮮・中国侵略上の懐柔策からもきわめて重要なものと理解され」て、大連にも「衛生組合」が組織されている。そして、必然的に「このような共同行動に参加しない中国人に対して不潔感をいっそう強めていった」というような結果を生みだしてもいたのである（注８）。

そのような「不潔感」が「文明」人としての自己確認をも伴うものであったろうことは言うまでもない。そして、満鉄を支えた人たちに「文明」人としての自己認識があったことは、「清潔」の有無だけでなく、先の調査書が、苦力の「極下等」な人たちが「一椀一著の設けもなく朝早く結束して長屋を飛び出し街上至る処の露店で各自好む処の物を買ひ食ひする、粟麺麭片手に生葱や大根を囓ぢる様は実に人間ばなれして居る」とし、正月に戸に「彼等の迷信から吉慶の文字を書いた赤い紙や、魔除けの武将を印刷した画などを貼り付け」ていると記していることにも明らかである。そして実はこのような「野蛮から防衛されるべき長所としての文明という考えを鍛えあげ」（注９）ることに帝国主義の特性はあったのであり、他者の生活習慣を「野蛮」や「迷信」と規定するこのような「文明」意識こそ、「人といふよりか猫にも劣る」といったような差異化＝差別意識と結びついて日本の帝国主義を支えたものでもあったのである。

ところで、漱石の中国人に対しての言葉、「人間に至つては固より無神経で、古来から此泥水を飲んで、悠然と子を生んで今日迄栄えてゐる」（『満韓』四十。以下数字のみ記す）は、先の満鉄調査部の「吾々には到底飲めない濁った水を平気で飲んで何の異常もない」という言葉となんと似ていることか。ここでさりげなく書かれる「古から此泥水を飲んで」という言葉の情報源が漱石自身でないことは言うまでもなく、汚い水を飲むことへの嫌悪、そして最終的に「如何にも汚い国民」（四十）とする規定に、私たちは帝国主義をささえた衛生意識＝「文明」の言説が漱石の言葉に浸透している現場を見ることが出来よう。 漱石は「下水」のない奉天に関しても記述しており、「飲料水に祟りをなして居る」「此汚水がどう片づけられるのかの処置を想像して見て、少し怖ろしくなつた」（四十七）と不安を

隠さないのだが、このような言葉に関しても同様のことが言える。

「水」だけでなく漱石は 「支那の家に固有な一種の臭」（四十六）についても触れており、「しかもあまり綺麗ではない。其上室の中が妙な臭を放つ。支那人が置き去にして行つた臭だから、依然として臭い。いくら綺麗好きの日本人が掃除をしたつて、依然として臭い」（四十六）と、「臭い」を「汚れ」の一種とみなして「綺麗好きの日本人」と対置させている。日記にも「支那町は臭し」（明治四十二年九月十七日）と記しており、「水」とともに「臭い」についても書いているのは、先に見た「空気」の清浄意識故のことと見ることも可能だろう。中国人の汚い洋服に触れることへの不快感を露骨に表してもいた漱石にとって、「空気」の汚れ＝臭いは、その侵犯を自力では防ぐことができないだけによけいに嫌悪の対象とせざるを得ないものだったはずである。

このように、「汚」れに対する漱石の視線は「満鉄」＝帝国主義者の視線とまったく一致している。そして、そうさせているのは「満鉄」と同じく、清潔度を尺度にして非衛生や不潔を排除する〈文明人〉としての自己確認と見るべきだろう。このような漱石や満鉄の視線が、単なる〈差異〉への驚きではなく〈差別〉的ものであると言えるのは、「衛生」というものが、強い国家を想定したイデオロギーとなり、必然的に「差別」を生んでもいたからだ。そしてそれが他国に向けられると、「人種差別」（注１０）を生み出す。実際に、このような「汚れ」の確認は、人種主義などの差別を生じ、帝国主義を正当化させる一つの要因ともなっていたのだし(注１１)、そういう意味では、『朝日新聞』という媒体を通して流通していた漱石の言説は日本の帝国主義を背後で支えるものだったのである。

漱石が「汚らしい」を連発するのを単に「感覚で押さえた事実」（注１２）とすることの危険はすでに明らかであろう。その「感覚」なるものは、一足先に「近代国家」に進入した文明人として鍛えられたものにすぎず、そのことを忘れて「感覚」を自明のこととすることは次なる差別を生むだろう。

先の調査書は「苦力の気質」を説明して「病気のほかは決して休むことがな」（A）く，「壮健にして無病なこと」（B）や、喧嘩もせず「体格が立派で耐久力に富んでい」（C）ることを「美点」としてあげている。そして「内地労働者を多数使役すれば少なくとも一、二割は病気または事故の為めに休むのが普通」なのに、「苦力にはかかる恐れが至て少ない」とする。苦力は「従順なる性質」（C）なので内地の労働者百人を使うより苦力千人を使う方がいいとし、「雲突くばかりの大漢」が多く、したがって重い豆袋を幾つもいっぺんに担いで運べることを「日本の仲仕などの到底模倣し得ざる美点」と褒めてもいる。「要す

るに、苦力の体力の優秀なる（D）を利用して土木や荷役や豆糟や煉瓦製造などの如き簡易工業に使用し、出来高払にして受け請負はしむるのが一番有利の苦力使用法である」とこの調査は結んでいる。

「油房内で油まみれた裸形の苦力の豆粕を扱ふところなど珍しい作業ぶり」（南満州鉄道会社刊『大連』、昭和８年）と、後の観光案内パンプレットにも書かれることになる大連の豆工場の労働者たちは、おそらくその「苦力」の代表格存在でもあったのだが、漱石は彼らに対して「大人しくて（C）丈夫で（B）力があつて（D）よく働いて（A）ただ見物するのでさへ心持ちが好い」（十七）と記述する。これは、ＡＢＣＤ、それぞれ対応するような形で先に見た満鉄の認識そのままだ。「大人し」いといったような言葉がすでに、ある「差別」を含む言葉であることはさておくとしても、ここでも私たちはそうと自覚せずに帝国主義の言葉を模倣してしまう漱石を見ることが出来るだろう。さらに漱石は「其沈黙と、其規則づくな運動と、其忍耐と其精力とは殆ど運命の影の如くに見える」（十七）と記して、苦力の生産性を強調しそれを「運命」という言葉で自明化することで、無意識のうちとはいえ被植民者の「従属化」（注１３）の過程に参加しているのである。

二、〈開拓〉の場所

「満韓」は「衛生」の観点からすると非「文明」国だったが、一方では「内地にもない」「電気公園」（八）や「最新式の敷方」の「電車の軌道」（八）があるなど、日本よりも進んだ「文明」を目にすることの出来る場所でもあった。そこは、諸外国では高い豆油が安く生産出来、日本の半分の値段の糸が生産され、塩水にも溶ける（九）石鹸が作れるような、技術の進んだところで、漱石をして「内地から来たものは成程田舎もの取扱にされても仕方がない」（八）というような感想を抱かせる程の場所になっていたのである。

このような「文明」の作り手の中心となったのは、 初代総裁後藤新平が植民地の経営方針とした「文装的武備」を基盤に「教育、衛生、学術、といった広い意味での施設」の拡充を図るための「科学的調査活動」をすることを目標にして作られた満鉄調査部であり、漱石が撫順まで出かけて行って「撫順の石炭の油母頁岩」の研究の説明を聞いたり、まっさきに豆工場に案内されたりしているのも、満鉄の中心事業だった豆と炭坑が日本に誇るべき規模のものだったからである（小林英夫『満鉄ー〈知の集団〉の誕生と死』、吉川弘文館、１９９６・９）。 後藤新平の「武力支配ではなく、開発による支配という考え」（高

橋泰隆「植民地の鉄道と海運」、『岩波講座　近代日本と植民地３』、岩波書店、１９９３・２）に基づいての植民地政策は、満州を「スチュヂオ（イギリスの美術雑誌。筆者）にでも載りそうな」（五十一）こぎれいな建物―教会、劇場、病院、学校―が並ぶところとしていた。そしてこのような満鉄の事業に漱石は無関心なふりをしながらも、それぞれの設備や規模に関して数字データを細かく記していて、満州の「文明」化状況を丁寧に伝えてもいるのである。

当時韓国の書店には『ほとゝぎす』や『中央公論』が並べられており、「家屋は皆日本流」（以上、明治四十二年九月二十七日付日記）で、満州には「スキ焼」を食べられる店と「膝の上に頭を載せて寝」させてくれる「名古屋訛」の「女」までが揃っていた（注１４）。

しかし、「家屋は皆日本流」というような「日本市街」の姿の背後には、たとえば一九一〇年代に日本に留学していた韓国人留学生の帰国記小説として知られる廉想渉の中編『万歳前』（一九二四）に記されているように、朝鮮人が日本人に土地を買収されたり、あるい満州へと追われていって新たな＜開拓民＞とならざるを得なかった状況があった。日露戦後には「生活関連の商店が増加」し、「特権をあてこみ一攫千金をねらった中小商人の進出がキーとなり、それに関連する諸商人、飲食店、旅館、家族、雇人が引っ張られ」（注１５）ていたのであり、漱石が見たのはそのような現場だったはずだが、それを漱石は単に「発展」と見ているのである。

漱石が満鉄の人々を描くにあたって〈開拓者〉のイメージを与えている――たとえば坑道を掘ったという「軍人」の話。漱石はその「根気の好いのに悉く敬服」（二十五）したとし、それが「人間以上の辛抱比べ」だったと記していた――のは、その苦労こそがその「発展」を支えたものと考えたからだろう。植民地進出にまつわる話は何よりも「苦労」談であることによって聞く（読む）人の感情移入を促していたはずだ。『朝日新聞』という媒体を通して伝えられるこのような話が、人々に植民地への夢をかき立たせるものとしての役割をも果たしたであろうことは想像に難くない（注１６）。

たとえ漱石が「植民地支配を肯定的に受け止めていた」（注１７）とするとしても、漱石には「植民地支配」の政治的武力的側面は見えておらず、「文明」のみが見えていたことは付け加えておくべきだろう。その「文明」こそが「植民地支配」のもう一つの顔であったとしても。ついでに指摘するならば、 前章で触れた、漱石の朝鮮滞在中の俳句や短歌で歌われる古都の美もまた、「文明」と同様に植民地主義を支える、変形されたオリエンタリズムでしかなかった（注１８）。

『草枕』で漱石が批判した「汽車」は、単なる「文明」の象徴であるにとどまらず、帝国主義の象徴でもあった。それは十九世紀半ば以降、イギリス、アメリカ、ロシアなどの列強が、ともにその利権を手に入れようとしたのが他ならぬ鉄道建設とその経営権だったことに瞭然としている。実際、韓国を貫通した鉄道の完成は日本に日露戦争での勝利をもたらしたし、韓国の釜山から最北端の新義州までしかれた鉄道、さらに満州における鉄道は日本とロシアの帝国主義をささえたものだったのだが、その鉄道を走る汽車にのっての満韓旅行において、漱石が、『草枕』に示された認識を持った形跡はない。その「汽車」のためにかの地の人々は「墓地人家の移転」（高橋、前掲論文）まで余儀なくされていたのだが、しかもその汽車は戦争のための軍隊と軍需品輸送に利用された後は「貨物輸送主導」となり、旅客輸送は二の次の「開拓鉄道」（前掲高橋論文）にすぎなかった。

漱石が、日本が受け入れた「文明」を「外発的開化」として批判していたにもかかわらず「満韓」においては「文明」を批判していないのは、前章の文明観分析で触れたように、それが「満鉄」で代表される「日本」が自発的に作り出した「文明」と見えたからである。つまり、実際に「文明」が「日本」みずからの要求による自発的ものと見えた時、それは批判されるはずはなかったのである。

漱石は日本の植民地での「活動」を「文明」の移植と考えていた。しかし、「文明」の移植（汚れ、迷信、立ち後れた文明的設備など）こそ、実は帝国主義の表向きの顔だったことは、先に「衛生」意識を通して見た通りである。いうならば、 漱石は帝国主義を、「文明」の名において許してしまったのである。

三、戦争・文明・帝国主義

反帝国主義の漱石のイメージをつくってきたのは、言うまでもなく国家主義や軍国主義への批判である。たびたび引かれるもののなかに晩年のエッセイ『点頭録』があるが、改めて読みなおしてみると、それは限定付きの否定だったことに気づかされる。

> トライチケの鼓吹した軍国主義、国家主義は畢竟独逸統一の為ではないか。其統一は四囲の圧迫を防ぐ為ではないか。既に統一が成立し、帝国が成立し、侵略の虞なくして独逸が優に存在し得た暁には撤回すべき性質のものではないか。（略）
>
> 勝つた者は勝つた後で、其の損害を償ふ以上の貢献を、大きな文明に対してしなけれ

ばならない筈である。少なくとも其心掛けがなくてはならない筈である。自分は今の独逸にそれ丈の事を仕終せる精神と実力があるか何うかを危ぶまざるを得ないのである。するとトライチケの主張は独逸統一前には生存上有効でもあり必要でもあり、合理的でもあつて、今の独逸には無効で不必要で不合理なものかも知れないといふ事に帰着する。

漱石の軍国主義否定は「既に統一が成立し、帝国が成立し、侵略の虞なくして独逸が優に存在し得た」時点を対象としている。漱石が批判するのはあくまでも「統一」という「目的」が成し遂げられたあとにも続く「戦争」なのであって、「トライチケの主張は独逸統一前には生存上有効でもあり必要でもあり、合理的でもあ」るとも言っているのである。戦争を「無効で不必要で不合理」と言い切っているのは「今の独逸」に関してのことにすぎない。つまり漱石は「統一」や「生存上」のために行われる（とされる）「戦争」は必ずしも否定していないのである。

たとえば『趣味の遺伝』は「厭戦」文学とされるが（注１９）、戦争を単に「神」の仕業とする「予」には、戦争の主体に対する意識は欠落している。その結果、戦争で犠牲にされる人間への目はあっても、戦争主体自体への懐疑は見られない。だからこそ「予」は「旗持ちは浩に決まつてゐる」と主人公に戦場の英雄の役割を担わせ、凱旋した軍人に「誠」を読みとり「涙」を落とすのだ。それは、まさに日露戦争が、日本にとっては「生存上」の戦争にほかならなかったからであり、西洋体験を通して自国の存立をめぐって危機意識を育てざるを得なかった漱石にとって、戦争は「人種と人種の戦争」（『虞美人草』五）として、むしろ正義だったはずである。

漱石は「私の個人主義」でも「個人主義といふと一寸国家主義の反対で、それを打ち壊すやうに取られますが、そんな理窟の立たない漫然としたものではない」と前提しながら、「国家の亡びるか亡びないかといふ場合に、疳違ひをして只無暗に個性の発展ばかり目懸けてゐる人はない筈です。私のいふ個人主義のうちには、火事が済んでもまだ火事頭巾が必要だと云つて、用もないのに窮窟がる人に対する忠告も含まれてゐる」としている。つまり、漱石は「国家が亡びるか亡びないか」といったような危機の時＝「火事」（戦争）の時に用意される「火事頭巾」（国家主義）の必要性は認めているのである。

漱石が否定し批判する「国家主義」はあくまでも平和な時の国家主義である。危機の際の国家主義は認められていることが「今の日本はそれ程安泰でもないでせう。貧乏である上に、国が小さい。従つて何時どんな事が起つてくるかも知れない。さういふ意味から見

て吾々は国家のことを考へてゐなければならん」「愈戦争が起つた時とか、危急存亡の場合とかになれば、考へられる頭の人――考へなくてはゐられない人格の修養の積んだ人は、自然そちらへ向いていく訳で、個人の自由を束縛し個人の活動を切り詰めても、国家の為に尽すやうになるのは天然自然」という言葉からも確かめられるであろう。

しかし、国家主義というものが、まさにその〈危急時〉という言葉を合い言葉に戦争や軍国主義へと「個人」を駆りたてていく近代イデオロギーである以上、漱石の言葉で言えば「国家といふものが危なくなれば誰だつて国家の安否を考へないものは一人もゐな」くなるような危機意識こそが国家主義を強化していくものであることはいうまでもない。第三章で述べたように、漱石の「個人主義」は実は「国家主義」につながるものだったのである。

ともかくも、おそらく、このような漱石を見て初めて「日露戦争というものは甚だオリジナル」で「インデペンデントなもの」とした漱石の言葉が理解されるのではあるまいか。漱石がそういわざるを得なかったのはそれをまさに「危急存亡」がかかっている戦争だと思ったからであり、戦争での勝利は「西洋に対して日本が芸術に於てもインデペンデントであると云ふ事」（「模倣と独立」）を証明してくれると考えたからにほかならない。

漱石は軍事力だけでなく経済や政治の力が、「芸術」の力につながるものと考えていた。それは漱石がイギリスにおいて「日本ハ真ニ目ガ覚メネバダメダ」（明治三四年三月十六日付日記）と強い焦燥を表しながら「文学モ政治モ商業モ皆然ラン」としていたことからも窺い知ることが出来よう。漱石は「政治」や「商業」（経済）の自立が精神的「インデペンデント」を保証してくれると考えていたのであり、日露戦争の勝利が「精神界へも非常な元気を与へる」とし、「斯く勝を制して見ると国民の真価が事実の上に現れた心地がする」（「戦後文界の趨勢」）とするのはまさにそれ故のことである。 そこに「勝つものと負けるものを拮抗させ続けて、絶対勝つ側には立たないというスタンスをとり続け」（注２０）ようとする姿勢を見ることは出来ない。西洋体験を通して「日本」という主体意識に目覚めた漱石にとっては、〈勝つ〉ことを願うのはむしろ当然のことなのである。それは、戦争の勝利が即「国民の真価」の発現となり、精神的に「敗北」していた過去を勝利の未来へとつなげることが出来ると思った故のことであり、「満韓」をめぐっての戦争＝日露戦争や「文明」を批判しないのも、そこに「日本」の「真価」＝〈主体〉＝ナショナル・アイデンティティの誇りを見たからだ。

だが、ナショナル・アイデンティティへのこだわりは、自らの自己拡張の欲望に気づか

ない。そしてそこに、たとえば小森陽一の言うような、「他人の自由を暴力で侵すような戦争はしない」といった「倫理」（注２１）が存在する余地はなかったのである。

戦争や国家主義、そして文明をするどく批判していた漱石は、「日本」がその遂行主体となるとそれらへの批判をやめている。漱石は西洋という他者に出会って始めて「日本」という自己に目覚め、ナショナル・アイデンティティに生涯こだわりつづけたが、そのことこそが、「国家主義」や「帝国主義」、そして「文明」を「インデペンデント」の名で 容認させていたのである。

しかし私は、冒頭でも述べたように、そのこと自体を批判したいのではない。それは〈近代〉という〈主体〉の時代――ナショナル・アイデンティティ確立の時代を生きはじめた東洋の知識人としては、おそらく避け得なかったことであろう。しかし、そのような漱石のかかえた問題から目をそらすことは、漱石の限界をふたたびかかえてしまうことになりかねないと思うのである。

注

１）東京外国語大学編『留学生のための日本史』（山川出版社、１９９０・３）

２）たとえば、大野淳一は新しい全集に収録されるようになった「満韓の文明」に関して「しかしほかならぬ漱石は、満州の日本人に頼もしさだけを感じたのだろうか」としながら「不揃なハイカラで押し通す」と漱石が語ったことをとりあげ、「「現代日本の開化」を思わせる一節」「皮相な日本の開化をより先鋭化したものが満州の開化であり、後者の「不揃なハイカラ」なる評語は講演にいう「上滑りの開化」の先取りである」とする。そして資本が満鉄にあることを口にしたことを「異例にするどい」指摘とするのである（以上、「「満韓の文明」その他の談話をめぐって」、『漱石全集第 25 巻』月報、岩波書店、１９９６・５）。しかし、「現代日本の開化」に関してはすでに第二章で触れたとおりであり、ある意味ではそれが「日本批判」のように見えたことがすべての誤読のはじまりともいえるだろう。漱石自身が「頼もし」いと言っているにもかかわらず、「漱石」に限ってそのはずはないという期待と信頼が、別の読みへの欲望を強いるのである。漱石は「満韓二国における「日本の差異」を聞かれて、「満州」は「資本が満鉄といふ一手にあつて、此満鉄だけは西洋と対抗しうるハイカラな真似が出来るが、その他の資本金は甚だ微弱なもの」で韓国の場合は「根津の新開地位のもの」だとしながら、「満州の方は度胸のある分限者が思ひ切つて人工的に周囲の事情に関係なく高層の開化を移植しつゝあると見れば間違ひはな

い」と語っている。漱石に重要なのは「西洋と対抗しうる」ことだったのであり、そのことを見ないぎり、このような誤読はおそらくいつまでも続くのだろう。『満韓』を論じた私の二つの論文（本稿では第六章と本章の基になった）をとりあげながらことごとく漱石の見方を好意的に、しかし傍証はない解釈を展開する、吉田真「夏目漱石『満韓ところべ』論」（『成蹊人文研究』第 8 号、平成１２・３）などもその範疇のものといえる。

さらに、その代表的なものとして、本論のもとになった９８年の私の論文の論旨を受けとめながらも、その後やはり漱石は植民地主義を告発・相対化していたとする小森陽一「漱石文学と植民地主義」（『国文学』、２００１・１）がある。小森陽一は、『門』の中でお米が伊藤の暗殺にたいして男たちにくりかえし「なぜ」と聞いているのを評価して漱石の植民地主義批判を見ようとするが、そこはむしろ、男たちは知っている情報から遮断されてしまっている、「女」の無知を強調したものと見るべきである。小森においては、漱石の言葉は、たとえ「欧米列強出身のプレンテーションの経営者たちを、あられもなく模倣・擬態」している登場人物が登場していても、あくまでもそのような状況を批判するための登場と解釈されてしまうのである。

３）このような考察は、柄谷行人『近代日本の批評　明治大正篇』（福武書店、１９９２・１）における論議に多くを負っている。

４）檜山久雄『魯迅と漱石』（第三文明社、１９７７・３）

５）米田利昭「漱石の満韓旅行」（『文学』１９７２・９）

６）「文明への不満」、『フロイト著作集３』（人文書院、１９６９・１２）

７）『日本近代思想大系２２　差別の諸相』（岩波書店、１９９０・３）参照。

８）木村健二「在外居留民の社会活動」（『岩波講座　近代日本の植民地５』、１９９３・４）

９）バリバール「人種主義と国民主義」（『人種・国民・階級』６３頁、大村書店、１９９５・１２）

１０）川村湊は「「帝国」の漱石」（『漱石研究』第五号、１９９５・１１）の中で中国人を描く漱石の姿勢を「おどけている」とし、「そこに“人種差別”的感情はない」としている。

１１）注９に同じ、５９ページ。

１２）注５に同じ。

１３）ホミ・K・バーバ「他者の問題――差異・差別・コロニアリズムの言説」（富山太佳

夫編『現代批評のプラクティクス４　文学の境界線 』、研究社出版、１９９６・４）

１４）日本の進出とともに大陸へわたった居住民中もっとも多数だったのは商業につく人たちだったが、「芸妓酌婦も６ー８パーセントと少なからぬ比率」（注８の文献）とされており、漱石が会った「名古屋訛の女」もそのような「芸妓酌婦」と考えられる。＜開拓＞者の男たちを慰撫する役割で女たちが動員されていたのである。

１５）注８に同じ。

１６）同じ「冒険者」といっても一般の人たちがどちらかというと落ちぶれて逃げていくようにして植民地へわたっていたのに対して、満鉄の〈開拓〉の主人公たちは総裁の中村是公をはじめ、大連の税関長など、植民地経営の中枢にいた。漱石の「旧友」でもあった彼らのほとんどもまた、東京帝国大学出身かそれに準ずるエリートたちであった。そこには「東大受験に失敗し」「北海道へ行って農学校」に入り、「満鉄の依頼に応じて蒙古も畜産事情を調査に」（「満韓」）来たような人物もいなくはなかったが、東大出身者が圧倒的に多く、満鉄の総裁も「東大出身者は半分以上」だったという。「満鉄に入社した彼らにとり、就職先は単なる民間会社ではなく亜国家機関」で「日本植民地鉄道の成立期が、藩閥官僚の時代から帝国大学出身者による専門官僚の時代への移行期にあたり、特に官僚養成機関としての東大があり、植民地官僚がそのネットワークから選ばれたためであろう」ともされているように、満鉄は「一種の国家機関」（高橋、前掲論文）だった。 漱石が植民地に出かけていくことになったのも、このような構造内でのことだったのである。

１７）中川浩一「漱石と帝国主義・植民地主義」（『漱石研究』第５号、１９９５・１１）

１８）柄谷行人「美学の効用」（『批評空間』Ⅱー１４、１９９７・７）参照。

１９）駒尺喜美「漱石における厭戦文学ー趣味の遺伝ー」（『日本文学』１９７２・６）

２０）小森陽一、柄谷行人との対談「夏目漱石の戦争」（『海燕』１９９３・３）

２１）注２０に同じ。